



令和2年5月号(274号)
(皇紀2680年)

新風

編集人 瀬戸 開

発行人 魚谷 哲央
年間購読料 2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
<http://shimpu.jpn.org/>
otayori@shimpu.jpn.org

金正恩は四月十一日から約二十日間、公的な場に姿を見せなかつた。その間には、重病説、死亡説、コロナ感染説、他にも幾つもの情報「確実なもの」として飛び交ったのだが、その時点で断言できるものは何一つなかつた筈だ。そしてこの五月、金正恩が姿を現すや否や、今度は「替へ玉」説や「手術を受けたが回復した」説が飛び交つてゐる。前者は立証不可能であり、後者についても推測の域を出ないであらう。現段階で確認できることは、金正恩の妹で事実上の後継者と見られる金与正党中央委員会第一副部長と何度も粛清の嵐をくぐり抜けてきた序列二位の

崔竜海最高人民会議常任委員長も、同じく姿を見せなかつたこと、金与正の後継者としての地位がほぼ確定したこと、この程度である。但し、その後突発的に起きた南北国境での北朝鮮からの銃撃、繰り返されるミサイル発射などの挑発行為などからも、この体制に何らかの不安定要因が生じてゐるのは十分考へられることだ。

問題なのは寧ろ日本側の姿勢である。このやうな状況下、冷静であることは必要だが、「情報を集める」「注視してゐる」といふ発言は、正直、拉致被害者がある日本国の政治家が言ふ言葉ではない。幾ら情報を集めたところで、決定的なことは北朝鮮の正式発表か、もしくは現在の時点で最も情報有してゐると思はれる中国とアメリカの判断を仰ぐしかないのが日本の情けない現状である。そもそも、北朝鮮情報はどんなに「集め」ても所詮「物知り」を増やすだけであり、「注視」してゐても拉致被害者が帰つてくるわけではない。朝鮮半島ウォッチャーはそれでいいかもしれないが、政治家

なら、拉致被害者救出運動なら、今、何ができるかを考へる時である。

これだけは断言できるのは、仮に金正恩が死なうが、また再起不能にならうが、金与正が後継者の座に就かうが、あの国の政治体制は変はらない。それはあの国が世襲独裁体制を敷き、金日成の作り上げた体制のシステムを絶対の「国体」として、それを継承することのみを正当性としてゐるからである。フルシチョフが行つたスターリン批判、鄧小平が行つた四人組批判などのやうな、先代の体制を多少なりとも否定する、さうしたことができないシステムなのだ（これに最も近いのはカルト宗教の組織である）。

ただし、一つ確実なことは、金正恩のみに何らかの異変があり後継者問題が前面に出れば、体制内で粛清の嵐が吹き荒れ、一定期間この体制にも「隙」が現れる。かつて金日成が死に金正日が政権に就くまでも一定のタイムラグがあり、北朝鮮国内での混乱は確実に